## 国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）

# ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像

【日時】2019 年 1 月 12 日（土）13:30〜17:00

【会場】共通講義棟 2 号館 201

【学長講演】

「ジェンダー平等と女性のリーダーシップ」

キム ヘスク（韓国・梨花女子大学校総長）

アンネ・ボルグ（ノルウェー科学技術大学副学長）

室伏きみ子（お茶の水女子大学長）

【パネルディスカッション】

「グローバル女性リーダー：多様性とネットワーク」

ソン イェラン（梨花女子大学校リーダーシップ開発院研究員）

キム・アイン・ズオン（ベトナム女性学院副学長）

石井クンツ昌子（お茶の水女子大教授・ジェンダー研究所長）

小林誠（お茶の水女子大教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

チョ ソンナム（梨花女子大学教授・リーダーシップ開発院長）

【パネル司会】

大木直子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【総合司会】

小林誠（グローバルリーダーシップ研究所長）

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構　グローバルリーダーシップ研究所　ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】170 名

【趣旨】

お茶の水女子大学は、女性リーダー育成の先駆的な実績を持つ梨花女子大学校およびノルウェー科学技術大学と連携して、ジェンダーと女性リーダーシップの共同研究を開始した。本シンポジウムは、それぞれの社会、大学における女性リーダー育成の課題を明らかにし、相互に解決の手法を学び、実践につなげる知見の基盤づくりを目的とする。第 1 部では、各大学での女性リーダー育成の取り組みを紹介し、今後の大学の課題を明らかにする。第 2 部では、韓国、ベトナム、日本のそれぞれの社会において必要とされるジェンダー視点に基づいた女性リーダー像とはどのようなものか、また、女性リーダー育成のための国境を越えたネットワークをどのように作り上げることができるか、多面的な議論をする。

【開催報告】

2019 年 1 月 12 日（土）、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構（GWL）主催国際シンポジウム「ジェンダー視点に基づいたグローバル女性リーダー像」が開催された。ジェンダー研究所（IGS）とグローバルリーダーシップ研究所（IGL）協働の国際シンポジウム企画第 2 弾である。それぞれの研究所の研

究パートナーである、ノルウェー科学技術大学（NTNU）、韓国の梨花女子大学、そして、交流が進められているベトナム女性学院からゲストスピーカーが招かれ、170 名の参加者を集めた。

第 1 部学長講演「ジェンダー平等と女性のリーダーシップ」には、金ヘスク梨花女子大学総長、アンネ・ボルグ NTNU 副学長、室伏きみ子お茶の水女子大学長が登壇した。金総長は、まず、韓国の女子大学は他国のものと比べて規模が大きい、という点を述べた。これは儒教の道徳観にある男女の区分が、女性に特化した教育を必要とし、女性たちによる自律的な空間を存在させてきたことに起因する。それが発展してきた結果、工学や医学といった女子学生が少なくなりがちな専攻も擁する女子対象の総合大学が存在し、現在も、女子大生の 30%以上が女子大学に在籍するという人気になっている。金総長は、この女性が集まる知的空間という環境が、新たな知的基盤、新しい理論的パラダイムを構築するプラットフォームとなるという期待を示し、それこそが、女子大学の存在意義であると強調した。

続くアンネ・ボルグ NTNU 副学長の講演は、ノルウェーという男女平等先進国においても、科学技術分野の研究者、特に教授職位に女性が少ないままである現状説明から始められた。NTNU では、その状況改善を目指して、ノルウェー・リサーチ・カウンシルからの助成金を受けての「バランス・プロジェクト」を実施した。まず、ボトムアップの方策としては、女性教員対象の教授昇格資格奨学金やメンター制度など、女性研究者がリーダーシップをとるための力をつける施策がなされた。そして、トップダウンの方策として着目したのは、科学・工学系の学部文化の変革である。学部長などリーダー職位にある者を対象とするワークショップで採用したアクション・リサーチのアプローチが、関係者のモチベーションを向上させ、成果につながったということである。トップダウンとボトムアップ双方向のアプローチと長期的な取り組みが不可欠であるという、NTNU の経験に基づく示唆がなされた。

室伏きみ子お茶の水女子大学長からは、女性が活躍できる環境整備が遅れている日本の現状について説明がなされた。お茶の水女子大学では全学的な取り組みにより、女性リーダー育成を推進している。学部生対象のキャリア・デザインプログラムや、働く女性対象のビジネスリーダー育成プログラムのほか、学術界での女性活躍推進のために、大学院生を対象とした海外派遣プログラム、女性研究者対象の妊娠・出産・育児支援プログラムなどを実施。それらは、GWL における研究プロジェクト成果に基づく知見により企画運営されている。今後も、国際的な共同研究や、企業と連携しての教育プロジェクトに精力的に取り組み、研究と教育を連携させて女性活躍のための環境を創出するという展望が示された。

第 2 部は「グローバル女性リーダー：多様性とネットワーク」というテーマによるパネルディスカッションである。梨花女子大学リーダーシップ開発院のソンイェラン特任教授は、科学・技術・工学・数学（STEM）分野における女性のリーダーシップについて報告した。STEM 分野における女性の障壁は、目に見えない無意識の部分に存在し、認知されにくいことから解消もされにくい。例えば、研究室内に SF のポスターやビデオゲームといった、男性ステレオタイプの「記号」が存在するだけで、そこは女性にとって居心地の悪い、働きにくい場所になる。また、その環境下で孤立を感じたり、誰からの励ましもなかったりすることが、研究者の道をあきらめる原因となる。梨花リーダーシップ開発院が実施して

いる梨花・ルース国際セミナーでは、女子学生たちに、STEM 分野に存在する女性差別やジェンダー・バイアスについての知識を持たせるとともに、リーダーシップスキルを身に着けさせることで、STEM 分野における男性中心文化を変革できる女性リーダーの育成を目指しているとのことである。

ベトナム女性学院のキム・アイン・ズオン副学長の報告では、ベトナムの大学における女性のリーダーシップに焦点が当てられた。ベトナムでは、学生の女性割合は 50%近くに達するものの、教員の女性割合はそれに比して低く、教授などの高職位の女性割合はさらに低くなる。ベトナム社会におけるジェンダー規範が、女性を従属的な立場に置いていること、家事は女性が担うものとされていること、定年が男性よりも 5 年早いなど、女性の機会を限定する構造的な要因は多い。また、リーダーシップのポジションの求人広告には、「男らしい」特性が強調されているため、女性たちは適性がないと思い込んで応募しない。このような事態の打開には、トップダウンで、クオータ制や女性による女性のメンター制度の導入が効果的であろうという提案がなされた。また、ズオン氏からは、「男女でリーダーシップの典型的なプロファイルが異なる」という考えが示された。

石井クンツ昌子 IGS 所長からは、日本におけるジェンダーとリーダーシップの現状と、その原因の分析が示された。日本で、経済、政治分野での女性の進出が遅れている理由には、伝統的なジェンダー・イデオロギーによる男女間の分業規範が根強く残っていること、いわゆる「ロール・モデル」が十分に存在していないこと、男性からの、そして制度的な家事育児への支援が不足していることがある。このような社会環境を変えていくには、幼児教育や初等教育、特に家庭科教育でジェンダー平等について学ぶことが重要との指摘があった。また、既存の研究報告がリーダーシップ・スタイルに性差はないと示していることからも、限定的に「女性の」リーダーシップの理想を追求することには疑問があると述べ、これについてのディスカッションを持つことが提案された。

小林誠 IGL 所長は、日本政府の女性活躍政策について分析した。首相官邸の主導により、内閣府男女共同参画局や経済産業省などが精力的に進めている女性活躍促進の目的には、女性人材の活用は利潤につながる、といった内容が目立つ。本来重要なのは、女性の活躍を当然とする「フェアネスの高い社会」の実現であり、そのために女性のリーダーシップが必要とされているのだ。昨今の「新自由主義」的な効率優先の考え方は、人権をないがしろにしがちである。大学という場には、「あるべき未来に向けて知的課題を解決していく」という社会的役割があり、女性リーダーシップの育成においてもそれを念頭において、国境を越えた知的交流を進めていくことが有益であると述べた。

総括し、チョソンナム梨花女子大学リーダーシップ開発院長のコメントでは、競争と成功に重きを置く従来の西洋を模範とする男性支配型モデルからの、パラダイムシフトが必要だと強調された。「創造的母性型リーダーシップ」として提案された新しいリーダーシップのパラダイムは、21 世紀のグローバル市民として、共生、分かち合い、平和そして持続可能性を重視するというものである。梨花女子大学とお茶の水女子大学の共同事業では、このような新しいパラダイムを構築し、これに基づく「グローバル女性リーダーモデル」の創出を目指したいと、今後の共同研究の抱負が述べられた。

続くディスカッションでは、司会の大木直子 IGL 特任講師より、男女のリーダーシップ・スタイルに違いはあるか？　アジアにおけるリーダーシップ論とは何か？　国際的なネットワーキングを成功させるために重要なことは何か？　アジア社会において男女格差がなかなか縮まらないのは何故か？という 4 つの質問が出され、今後のリーダーシップ理論構築の基礎となる議論が展開された。お茶の水女子大学と NTNU、梨花女子大学との共同研究への期待が高まるシンポジウムであった。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）